

# 学生の地元意識と AL についての考察

牧 野 芳 子  
徳 井 公 樹

## 【抄録】

本稿では、学生の生育環境が、アクティブ・ラーニング（以下 AL）に対する意欲や就職に対する意識に影響を及ぼすのかどうかという点に焦点を当てた。方法としては、インタビュー調査の内容について考察している。対象は、京都市内の大学において、昨年度から実施してきた授業見学とその授業の受講生、および学生を受け容れている地域の行政職員である。結果として、学生が持つ地元への意識が、就職に関する意識に影響している事例や、学生の生育環境の多様性が確認できた。また、学生を受け容れている地域社会側の AL への意識や現状についても知ることが出来た。今後は、さらなる聞き取り調査や、本学で行った学生の地元意識に関するアンケート調査結果の分析などの課題を検討する必要がある。

キーワード：地元意識，学習態度，地域社会，コミュニケーション能力

## 1. はじめに

学生の生育環境は、現代における地域社会の現状に目を向けた時その多様性が推察できる。そのような環境の中で育った学生が、AL 授業をどのように認識し、取り組んでいるのか。また、その後の就職活動への意識にどのような影響があるのか。このような点に視点を置き、本稿では、昨年度に続いて、学生の地元意識と AL との関わりについて考察を試みた。

方法としては、昨年度から今年度にかけて行った、京都市内の大学における聞き取り調査の内容と結果から、学生が育ってきた環境について、学生の地域社会への関心、AL に対する学習態度や意欲との関連、就職活動への意識等を検討し考察する。さらに、これまで学生を受け容れてきた地域社会と学生との関わりについて、行政の立場からみた意見について検討、考察する。また、今回は分析までに至らなかったが、昨年度末本学の卒業生対象に行ったアンケートにおいて、地元意識に関しての質問項目を記載しておく。

## 2. 京都市内の大学における聞き取り調査から

2017 年度から 2018 年度にかけて、AL 科目の授業見学とその授業を受講している学生数名を

対象に聞き取り調査を行った。そのうち本稿で取り上げる調査は以下の通りである。

2017 年度

①2018 年 1 月 12 日（金）：A 大学

PBL 受講生数名と調査者による聞き取り調査

②2018 年 2 月 15 日（木）：B 大学

初級地域公共政策士報告会の報告者 3 名と調査者による聞き取り調査

2018 年度

①2018 年 7 月 12 日（木）：C 大学

初級地域公共政策士の授業受講生 3 名と調査者による聞き取り調査

## 2-1. 学生の生育環境の多様さについて

事例 1：帰国子女である学生 A の実生活と地域社会との関わり

父親の仕事の関係で幼稚園から小学校時代をカナダで過ごし、中学入学時に帰国する。その後、中学から大学にかけて京都市内の私立校に通学する。父親の勤務地が滋賀県南東部に位置する郊外で、そこに在住している。現住所は人口約 9 万人、35000 世帯の合併都市であり、山間部や農地が広がるどちらかといえば田舎に近い地域である。実生活では地域社会とのつながりはほぼ無く、血縁者も近隣にはいない。

事例 2：都市郊外で生育期を過ごした学生 B と、地域社会との距離

大阪北東部郊外の都市に実家がある。実家の住所は、人口約 40 万人、18 万世帯で、ベッドタウン的な郊外都市である反面、歴史ある街道沿いの宿場町でもある。「地域は地主が多い」と言い、親は自治会に入っていたが、「やめたい」と言っていたことを記憶している。

地元との関わりに関しては、部活で他府県に遠征に出ていることが多く、実質的にも関わりが持てなかった。親が自治会に入っているにもかかわらず、地域社会との具体的な繋がりはなかったし、持てなかったという。

学生の地元意識については、学生の地元意識が育つ背景として、学生の育った家庭とその家庭を取り巻く地域社会とのつながりがどうであったかを捉える必要がある。その過程では、学生を取り巻く地域社会が都市部なのか、農村地帯の様ないわゆる田舎なのか、家庭が自治会へ加入していたのかどうか、といったことが一つの目安となる。例えば、学生が、現在京都市内で、下宿など一人暮らしをしていたとしても、その実家が大きな都市部であれば、自治会への加入や活動など、地域社会との関わりの可能性は弱いのではないかと推察される。また、農山漁村のような地域であれば、自治会への加入はほぼ強制、全戸加入が前提という場合が多く、地域社会との関わりは必然的に強くなるのではないかと推察される。

しかし、事例1の学生Aのように、農村地帯に実家があっても、都市部へ通学し、学校も中学から大学まで同じ系列の私立校で育っている場合、地域社会との関わりは無く、地元意識も認識されない。育っていく環境の中で出会う人々も、その生活レベルやそれぞれが暮らしてきた地域環境が、自ずと限定されてくる可能性がある。

一方事例2の学生Bの場合、学生Aの住む地域の4倍以上となる都市に実家があり、自治会加入世帯で育っている。しかし、学生B自身は、部活で遠征していることが多く地元との関わりは無かったという。おそらく、遠征を繰り返すようなチームに所属していれば、その練習にも多くの時間を費やしているであろう。昨今、オリンピックや世界選手権に出場するようなトップアスリートたちは、3～5歳くらいの幼少期から卓球・体操・水泳・スケート・サッカーといった競技を始めている。野球やサッカーなど地方都市に根拠地を置くチームも多くなり、そのチームが選手育成のためクラブを併設したり、そのクラブに入る為のクラブが出来たりしている。一流を目指さなくても、一般的に、中学に入ると部活で時間を取られ、地域社会との関わり以前に、家庭で出かけることもままならなくなるという状況はよく聞く話である。学生Bの場合、親も自治会参加については懐疑的であるようなので、親に部活を休んでまで自治会活動への参加を促されることもなかったと考えられる。また、「地主が多い」という言葉からは、大きな都市である反面農村的な旧来の地域社会の様相が推察される。「自治会を抜きたい」と親が話す背景には、自治会の凝集性や拘束の強さがあるのではないだろうか。

## 2-2. インタビュー調査結果に見る地元意識

### 事例3：京都市伏見区の学生C

祭り等で5歳くらいから、地域の大人と関わってきた経験を持つ。その経験から、人格形成・コミュニケーション能力・大人への対応の仕方等が身につき、就活にも活かしていると強く思うとのことである。

### 事例4：神戸市内に実家がある学生D

両親が共働きだったので、小さい頃から、子ども会や、学童に行っていた経験を持つ。地域で育ったという認識がある。実家へ帰りたいとは思わないが、地元が結構好きだなと思えるという。その理由として、近所の人に「めっちゃ久しぶりに会ったな～」とか、「昔お世話になった人だな」と思えるから、「多分帰りたいんやろなと思えるので。」とのことである。

### 事例5：京都市二条近辺在住の学生E

京都でずっと生きているので、就職したい・地域に貢献したいという気持ちはすごくあるとのことである。祖母宅がお店で、地域の人がよく来ていて、育まれたという認識があるという。その後祖母宅を出たが、近所に住んだので、ずっと地域とのつながりは続いており深い。子ども会

や学童にも行った経験を持ち、親も自治会長などを務めている。自分も今後ずっとその地域に住み続けたいと希望している。

学生 C は、地元の祭りがつながりを生み出しており、学生 D は地元の子ども会や学童での体験が今も心に残っている。学生 E は地元の人たちと家族の様に過ごしてきた日常の体験がベースになっている。3名の学生は、地域環境としてはそれぞれ違うが、幼少期から地域の人たちと関わり「育ててもらった」という認識を持っているという点については共通している。また、その経験が良いイメージをそれぞれの中に残しているという点についても同様である。それ故、学生 E は明確に「地元で貢献したい」という意思を持っている。学生 C と学生 D も、そこまで強い気持ちは確認できなかったものの、それぞれの語りから、地元とのつながりを持ち続けたいと考えているのではないかと推察できる。

学生 C は、幼少期から地元と関わってきた経験によって、自身の人格形成や、コミュニケーション能力、大人に対して「失礼なことを言わない」など対応の仕方が身についたと自覚しており、それが就活にも役立っていると述べている。学生 D は、地元に戻った時かつて世話になった人に会うことで、幼少期の経験が蘇り、地元とのつながりを再認識している。それは学生 D にとって、自分の居場所がここにあると再認識することに繋がっているのではないかと推察される。学生 E は、今後もここに住み続けたいから、住み続けられなくなるような就職は選択しないとはっきり述べている。

### 3. 行政への聞き取り調査について

学生を受け容れている地域の行政職員への聞き取り調査は以下である。

\*2017 年度

2018 年 2 月 19 日（月）：兵庫県 F 市 A 氏

F 市は、D 大学と連携して、地域に学生が入って関わりを持つフィールドワークを数年来実施してきている。その結果として、学生の中には、役所を通さず地元の人と連絡を取り合って、信頼関係を構築できている者もいるという。A 氏は、「それも非常に大事な要素」と考えており、「それは学生が成長しないとできないことではないかと思う」と述べている。また、卒業生が、自分達でグループを作って、これも役所を通さず引き続き地域に来ているとのことである。OB が地域に入っているいろいろな手伝いをしており、「卒業してもなお、F 市のことを気にかけていることがありがたい」と述べていた。

その背景には、A 氏の理念がある。「基本楽しく面白く」それは、地元の高齢者がそう感じて、それを見た学生がやりがいを感じてくれればよいという。そういう経験の中で、全員でなく

でも F 市を第二の故郷のように感じる学生が出て来たり，教員や行政がセッティングしたものをこなすだけでなく，学生自身が自分で考える方向に変わってきたりするという。

地元では，学生が発する「食べ物おいしい」「景色がきれい」といった素直な感想が誉め言葉となって，地元の人たちの心に大きく響くという。それは，地元では当たり前すぎて，地元の子や孫たちからは聞けない言葉であるようだ。A 氏は，地元以外の学生たちに褒めてもらうことが，地元の人たちに誇りを取り戻してくれ，地域が明るくなることに繋がると考えている。そして地元の子供たちが，そうしたことを見聞きする経験を通して育ってほしいと期待している。

#### 4. 地元意識を問うアンケート調査について

2018 年 3 月 18 日（日），佛教大学通学課程卒業式当日，社会学部卒業生を対象に行った。例年卒業生対象のアンケート調査は行なわれているが，今回の調査では，特に学生の「地元」に対する認識や地域社会とのつながりについて具体的に知り得るように，以下のような設問を設定し調査している。

##### ①地元について

1. 「地元はどこか」と聞かれたらすぐ答えられる
2. 地元と言える場所はない
3. 「地元」とは何かわからない
4. その他（\_\_\_\_\_）

##### ②地域の行事などの参加経験について

1. 小学校の頃，住んでいた地域の行事など
  1. 年（\_\_\_\_\_）回くらい
  2. 参加したことがない
2. 中学校の頃，住んでいた地域の行事などに
  1. 年（\_\_\_\_\_）回くらい
  2. 参加したことがない
3. 町内会や消防団，まつりなどの活動が盛んな地域だったか
  1. そう思う
  2. ややそう思う
  3. あまりそう思わない
  4. そう思わない
4. 近所での助け合いがほとんどない地域だったか
  1. そう思う
  2. ややそう思う
  3. あまりそう思わない
  4. そう思わない

##### ③小学校および中学校の頃の地域の行事との関わりについて（当てはまるもの全て選択）

1. 行事に参加するのが楽しみだった

2. 行事が大嫌いだった
3. 主催者側の手伝いをするのが好きだった
4. 自分たちで行事を企画したことがある
5. 家族が主催者側にいた
6. 家族が参加を嫌っていた
7. 子ども会などに入っていなかった
8. 家族が連れて行ってくれなかった
9. 行事の打ち上げにも参加した
10. 今でも参加している
11. 今でも手伝っている
12. 将来家族を連れて参加したい
13. 当てはまる選択肢がない

④大学入学前に最も長く住んでいた地域の人々は、一般的に信用できると思うか

1. とてもそう思う    2. ややそう思う    3. どちらとも言えない
4. あまりそう思わない    5. 全くそう思わない

⑤大学入学前に最も長く住んでいた地域の人々に、どの程度愛着があるか？

1. とても愛着がある    2. やや愛着がある    3. どちらとも言えない
4. あまり愛着がない    5. 全く愛着がない

⑥現在の地域との関わりについて

1. 住んでいる地域に愛着がある
  1. そう思う    2. ややそう思う    3. あまりそう思わない    4. そう思わない
2. 地域の問題を解決したい
  1. そう思う    2. ややそう思う    3. あまりそう思わない    4. そう思わない
3. 地域の人間関係は煩わしい
  1. そう思う    2. ややそう思う    3. あまりそう思わない    4. そう思わない
4. できれば地元で就職したい
  1. そう思う    2. ややそう思う    3. あまりそう思わない    4. そう思わない

⑦転居（引っ越し）の経験について

1. 小学校の頃
  1. したことがある（回数：\_\_\_\_\_回）    2. したことはない

## 2. 中学校の頃

1. したことがある（回数：\_\_\_\_\_回）
2. したことはない

ここに挙げたのは、そもそも現代の学生は「地元」という言葉自体に対してどの程度認識しているのであろうか、という疑問から設定した質問項目である。まだ、分析が出来ていないが、本稿の2で考察したように、アンケート調査で現住所、あるいは地元の場所を問う設問において、農村の住所が出てきた場合、旧来の凝集性の高い地域社会の中で育ったか、あるいは生活していると捉えてしまう可能性が高くなる。しかし、これまで考察してきた個別の聞き取り調査では、2で挙げた学生のように、田舎に住んでいてもほぼ大都市在住者同様の生活をしている学生や、大都市に住んでいても、旧来の農村地帯の凝集性の高い自治会と関わってきた経験を持つ学生もいる可能性がある。今後のアンケート調査の分析においては、その可能性も踏まえて、慎重に取り組む必要がある。

## 5. まとめにかえて

本稿で取り上げた聞き取り調査結果からは、まず、学生を取り巻く環境の多様性が捉えられた。これはアンケート項目からは出てこない点でもあり、地元意識と AL との関わりについては、聞き取り調査の方が、有効と考えられる。しかし、誰に聞いたかという点も重要である。本稿で挙げた学生に関しては、受講生の中から、調査に応じてくれた学生、つまり、聞かれることに抵抗が少なく、授業にも積極的な学生、すなわちもともとコミュニケーション能力や学習意欲が高い学生に偏っていた可能性もある。結果として、確かに地元意識と AL との関わりは確認できたが、それが一般化できるかどうかは今後の課題である。

また、行政サイドの話を聞き取るにより、必ずしも地元の学生によって地元が活性化すること、つまり U ターンだけに期待するのではなく、地元以外の学生が地域に関わることで、地元の学生以上の効果がある場合もあることがわかった。そこに関連して、本稿2の事例1：学生 A の話の中で、カナダでは移民の国家であるためか、自分が外国人であることを意識したことはなかったという。逆に、帰国後の方が「グローバル」という言葉を見聞きする機会が多く、その度に違和感を感じたという。つまり、ことさらに「グローバル」が強調されること自体、いかにグローバルではないかということであろう。同様に地域社会と AL の関係では、「地元」にこだわらない考え方も必要ではないかということである。

最後に AL の授業形態について少し述べておく。AL といえば、やはり、フィールドワークの様な授業形態が主であり、ともすれば従来の、講師の話を聞き質疑応答するといった形態が否定される傾向に陥る可能性もあるようである。しかし、その形態は必ずしも否定されるべきものではない。2018 年 C 大学で行った聞き取り調査の際見学した授業では、毎回、京都市内の企業か

ら社長などを講師として招き、話を聞く形態をとっている。ただし、毎回その企業について調べ、それぞれに質問を考える予習をして授業に臨んでいるという。つまり、形態としては受動的であっても、学習態度において自主性やコミュニケーション能力を発揮できるような場や仕掛けを作り、確実に実行させることで、学生を育てることもできるのではないかと考える。

#### 参考文献

- ・合田博子『宮座と当屋の環境人類学－祭祀組織が担う公共性の論理－』2010 風響社 2010
- ・今田高俊「個人化のもとで共同体はいかにして可能か」2017『学術の動向』日本学術協力財団
- ・鈴木規之編『与論島のリアリティー－2012. 9. 社会調査より－』2013  
琉球大学法文学部 社会学専攻社会学コース「社会学実習」2012 年度報告書
- ・藤井和佐・杉本久未子編著『成熟地方都市の形成－丹波篠山にみる「地域力」－』2015 福村出版

(まきの よしこ 共同研究嘱託研究員／佛教大学研究員)  
(とくい まさき 共同研究嘱託研究員)